

「私の日本」

「永住」表明 ドナルド・キーンさん

Donald Keene

福島第1原発の事故が深刻化し、海外脱出する人々が相次ぐなか、この人は「日本に永住したい」と表明した。日本人より日本に詳しいといわれるコロソビア大の名誉教授、ドナルド・キーンさん(88)。70年間、日本と向かい合ってきた大学者の目に、この国はどうか映っているのだろうか。

書は『大きくない』とは聞いてしまったが、本心に良かった。松島と中尊寺。いざれ江戸前期の俳聖、松尾芭蕉(1644～94)の紀行文『奥の細道』に登場する多摩地だ。キーンさんも『奥の細道』を英訳し、『紅毛奥の細道』と

いう作品を書いている。「あれは昭和30(1955)年です。実際に奥の細道を歩こうとしました。でも駄目でした。未舗装の道はトラックが走るたびに土煙りが舞い、ほごりまみれになった。やむなくバスと汽車を乗り継いでの旅。『松島では芭蕉と同じように旅館の障子に泊まり、魔王の眺めを楽しみました。季節は初夏。『松島の瑞巖寺で大きな白梅と紅梅が咲いていて、ふと先を鳥と

米ニューヨーク・マンハッタン北西のアップタウン地区。アパート階のキッチンさんの自宅からは、ハドン川の流れが見える。お邪魔したのは、4月21日のにまた風の冷たい日。毎年1月から6月まで、このアパートから大学に通い、残りを日本で過ごす。そんな日々を40年ほど続けて来た。

「松島(宮城県)はどんなりましたか」

「あれは、いともありましたが、毎日本新聞さんがたがねだ。毎日新聞は松島に大きな被害はかかりませんでした。日本人の姿勢は本気で報じていると伝えると、キーンさんはほっとした様子で「松島と中尊寺(右手奥平泉町)がどうなったかと心配していました。中尊寺の被害に心動かされた。ある友人

「それは、いともありましたが、毎日本新聞さんがたがねだ。毎日新聞は松島に大きな被害はかかりませんでした。日本人の姿勢は本気で報じていると伝えると、キーンさんはほっとした様子で「松島と中尊寺(右手奥平泉町)がどうなったかと心配していました。中尊寺の被害に心動かされた。ある友人

「それは、いともありましたが、毎日本新聞さんがたがねだ。毎日新聞は松島に大きな被害はかかりませんでした。日本人の姿勢は本気で報じていると伝えると、キーンさんはほっとした様子で「松島と中尊寺(右手奥平泉町)がどうなったかと心配していました。中尊寺の被害に心動かされた。ある友人

大震災…騒がず 悲しみから復興へ



D・キーンさん＝寺本敦子撮影

この人々と共に生き死にしたい

心の奥底に「してはいけないこと」持っている

電話で「日本人が騒がないのは仏教の無常観か、僧教のおかげで」と言ってきた。私は僧教的だと思っ「私は僧教的だと思っは電話で「日本人が騒がないています。表面的に僧教は「してはいけないこと」を持てても、日本人は心の奥底に「紅毛奥の細道」と

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

「私も今回、高島とまった。同じ気持ちになりました」

こうした例をあげるのには、少し軽すぎるという印象を与えるかもしれない。しかしいかに些細であるろうと、そうしたものは、太古にまでさかのぼる日本人の美的趣味が、今も日本人の生活の中で、どれほど重要な役割を果しているかを示している。日記、隨筆をはじめ、千年前に書かれた物語の描写を読んでみるがよい。そうすると、いかに日本人が、美に没頭して生きていたかがはつきり分かるはずである。ヨーロッパの騎士は、兜の中に思ひ貴婦人の手袋を入れて出陣した。しかし、まずその手袋を調べて、果してそれが自分の美的規準に合っているかどうかを確かめて、そのお姫様のためなら生命を賭けてもよいという己の決心を確認する気持は、起こらなかつたであろう。彼にはその手袋が、かつて姫の手をやさしく包んだということだけで、十分だったのだ。その材料、色、形、その他、小うるさい吟味などしては、かえって姫を慕わしく思う彼の気持を削いだのにちがいない。それに反して十一世紀の日本の貴族は、自分が愛情を捧げる相手の女性の、美的趣味の高雅さに関して、断乎として謙るところがなかった。女から受け取る恋文や歌の筆跡は、完璧でなければならず、あるいは女の着物の袖をちらっと見ただけで、彼女が色彩配合の感覚に少しでも欠けるところがあることが分かれば、もうそれだけで彼の愛情は、一度にさめてしまつたかもしれないのである。

美への帰依心が殆ど宗教に近いところまで高められたのは、十世紀の宮廷であつた。それは当然物腰振舞の優雅さ、それにルイ王朝のヴェルサイユ宮廷を理想させる典礼の遵守なども含んだ。しかしヴェルサイユでは、貴婦人のために詩を書いたのは、例のフチ・ルキ、あるいはフォックと呼ばれた、いわゆる伊達男だけだつたが、日本の宮廷では、それは天皇から、下級役人に至るまで、つまり宮廷人全員だったのだ。恋文は普通歌で書かれた。しかるべき紙質の紙に、筆でしかるべき墨色を用いて書かれ、きちんと畳まれ、季節に応じた花の小枝を添え、主人の地位にふさわしい衣裳を着けた小姓によつて相手に届けられた。

美的趣味は、宮廷から地方にまで、そして上流階級から庶民にまで広まつていった。例えば花見である。この年中行事は、明らかに京都の宮廷に始まつたのだが、今日では都鄙、階層の上下を問わず、日本中で行われている。桜の季節が来ると、毎日ラジオやテレビは、囀睡を呑んで聴く大衆に、今日はどこで八分咲き、どこそこでは七分咲き、と逐一「桜前線」の移動を報告する。そして休日には、浮かれた工員さんの大集団が、大型バスに分乗して、今は盛りの花の名所へと繰り出してゆくのだ。もちろん日本の家庭のすべてが、美的満足を与えてくれるわけではない。しかし経済的に可能なかぎり、どこへ行つても、少なくとも家どこか一隅には、伝統的美意識を暗示する、なにか簡素で優雅なものが見つかるのが普通である。

日本人の美意識を調べようと思えば、この問題を直接取り扱つた、あまり多いとは言えない古典文学の書き物によるものよい。しかしそれだけではなく、実際の文学作品や批評作品、芸術品それに日本人の全体的な生活態度自体などという、実例を通じて見るのがよいだろう。美意識の広がりには、それほど広範にわたつていているからだ。これから日本の美意識を取り上げていこうとする際、それを中心に論じてみたいいくつかの項目が頭に浮んで来る。「暗示、ないし余情」、「いびつき、ないし不規則性」、「簡潔」、「ほろび易さ」である。そうした互に関連する美的概念は、日本人の美的表現の、最も代表的なものを志向している。とはいえ、これらの反対概念、すなわち「誇張」、「規則性」、「豊饒」、そして「持続性」なども、決してなくはないこと、これは繰り返すまでもない。

日本人の美意識についてどんな一般論を言つてみても、おそらく誰でも知っている反証をあげて、簡単に異議をとえられるだろうし、あるいは悪くすると、論破ささえられるかもしれない。すでに英語の辞書にも入つている日本美学を代表する日本語に、「波い」という言葉がある。そしてこの言葉が意味する美的表現上の性格は、まず控え目、そして洗練ということだ。確かにどちらとも、日本の芸術表現に典型的な性格である。しかしそれならこの性格でもつて、あの歌舞伎の舞台上で見る華麗さや、長い間日本人自身によつて美の極致とされてきた、あの日光東照宮のけばけばしさや、どう説明すればいいというのだろうか？ 言うまでもなく日本人の美的趣味が、何百年もずつと変ることかあった、などということはありえない。また日本人の好みや、社会的階級差や、教育程度のちがひによつて影響されなかつた、ということもありえない。したがつて日本の美学についてなにか一般論を言う時には、そうしたことを憶えておいて、決して損はしないだろう。それでもなお、いろいろ出て来る例外にもかかわらず、あるいはいくつかの美的理想について、どうしても日本特有のものだと言つていいものがあるのではないかと私は思つてい

ます第一に、日本人の日常生活の中で、美的表現など入り込む余地はないように思える領域にも、美的配慮が行き届いている事実をあげることが出来る。生活標準がすべて近代化され、国際化されている今日だというのに、外国から日本を訪れるものは、殆ど例外なく、バスの運転手の頭上に、本物、あるいは造花を入れた小さな花入れ、あるいはトイレットの壁の花籠から、優雅に垂れている花を見るだろう。あるいはどこか鉄道の駅の片隅に、農産鮮かに、いかに芸術的に書かれた看板を見るかもしれない。なにかかと思つて眼をこらすと、なんと「遺失物係」とある。そして、そう言えば、これは急いでいる時など、時にありがた迷惑なこともあるけれど、あの百貨店の店員の、芸術的としか言ひようのない包装。外国からの訪問者は、こうした光景を見て驚くのである。美的感覚がそれほど広く行き届いていることが、いかに不思議だからだ。しかし考えてみれば、西洋で、バス、トイレット、遺失物置場などが、花を飾つたり、書道の展示場でもつてははいけないと考えられているのも、また不思議な話なのだ。あるいは、おそらく一番有名な例としては、あの絶妙としか言ひようのない、日本料理の視覚的効果だ。味にはしほは裏切られることはあつても、外国人はみな、あの美しさを褒め讃える。まず量の上に敷いた座蒲団の色、床の間の花に始まり、末は小さな醤油差しに至るまで、あらゆるものが絶妙な美的感覚で取り合わざれた一流料理店の座敷での日本料理。実にあれば味覚的体験というよりは、むしろ美学的体験と言つたほうがよさそうである。他のアジアの国々と対照して、日本人の生活の中で占める美の位置について知りたと思えば、今日、シヤカルタで、またはその昔の上海で、一流の中華料理がどのように客に出されるか、あるいは出されたか、を思えば十分である。